TOP MUSEUM

東京都写真美術館ニュース
eyes113

本橋成一とロベール・ドアノー
交差する物語

TOPコレクション
何が見える？
「覗き見る」まなざしの系譜

田沼武能 人間讃歌

▲本橋成一
《羽幌炭砿 北海道 羽幌町》
〈炭鉱〉より 1968年
©Motohashi Seiichi

◀ロベール・ドアノー
《4本のヘアピン、サン・ソヴァン》1951年
©Atelier Robert Doisneau / Contact

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2023 Vol.113

INTERVIEW

「本橋成一とロベール・ドアノー　交差する物語」展

山田裕理学芸員（本展企画者）、佐藤正子さん（コンタクト代表）に聞く

Motohashi Seiichi and Robert Doisneau Chemins croisés

1960年代から写真家として活躍し、映画監督としても高く評価されている本橋成一と、戦前に活動を始め「フランスの国民的写真家」と称されるロベール・ドアノー。二人の作品は、市井の人々への関心と愛情に満ちたまなざしから立ち上がる物語を感じさせます。「本橋成一とロベール・ドアノー交差する物語」展の開催を前に、企画した山田裕理学芸員と様々な写真展を手掛け、ドアノーの日本での著作権管理を行う佐藤正子さん（コンタクト代表）に見どころを聞きました。

── ドキュメンタリー写真・映画の現役作家である本橋と、ありし日のパリの日常を捉えた作品で知られるドアノーの組み合わせは、やや意外感があります。二人はどんな関係でしょうか。

山田　本橋はドアノー作品に魅了されて写真集を集めていたそうです。1991年に本橋はパリで本人と会う約束をしたのですが、飛行機が遅れて間に合わず、ドアノーは約束の場所にメッセージ入りの写真集を贈り物として置いていったそうです。

ドアノーは当館の外壁にディスプレイされている《パリ市庁舎前のキス》※1が有名ですが、テーマが本橋と重なる作品が数多くあり、懸命に生きる人々の姿にカメラを向ける姿勢が共通していると思いました。

佐藤　ドアノーは1912年にパリ郊外ジャンティイに生まれ、労働階級の家庭で育ちました。パリ出身でなかったことが、じつは重要な気がします。

東京の郊外は主に住宅地として発展しましたが、1920年代頃までパリは城壁に囲まれていて、城壁の外側に位置するパリ郊外は当時、主に低所得者層や移民が住む地域でした。そこで育った彼にとってパリは華やかな憧れの場所でした。だからこそ、その魅力を引き出す写真が撮れたのだと思います。生い立ちもあってか、常に弱者や労働者側の視点から世の中を見つめ、生涯住み続けた郊外からパリに通っていました。

本橋、カウンターの輩には気をつけたまえ。
僕は奴らにとことんやられてしまったからね。

―ロベール・ドアノー 1991年6月

フランソワ・カラデック、ロベール・ドアノー
『La Compagnie des Zincs』セゲール社、1991年

山田　二人とも第二次世界大戦を体験しているのも共通点です。1940年に東京・東中野に生まれた本橋は東京大空襲で逃げ惑った経験を持ち、焼け跡の風景が自分の「原点」だと語っています。デビュー作は、1960年代後半に写真専門学校の卒業制作で撮影した『炭鉱〈ヤマ〉』。九州・筑豊に何年も通い、斜陽期の炭鉱町の風景と死と、隣り合わせの日常を見つめたシリーズです。

今回、日本初公開のドアノーの炭鉱の作品6点も同じ会場に展示します。二人の作品を比べていただくと、被写体との距離感や撮り方の違い、主燃料が石油に代わる「エネルギー革命」の前後といった社会状況の変化も見えてきそうです。

── 「サーカス」や「市場」も共通するテーマですね。

山田　本橋は、小沢昭一※2が1975年に創刊した『季刊藝能東西』で彼と一緒に様々な芸能の現場を回り、カメラで記録しました。そのなかにサーカスがあり、一座と仲良くなって家族的な人間関係やプライベートと舞台が混ざる空間に興味を持ったといいます。

佐藤　パリの街は、しばしば移動遊園地が出現してサーカスの興行も盛んです。大勢の人が集まって色々な人間模様が生まれるので、ドアノーは継続的に撮影を行い、自身の娘や孫たちを入れて撮った作品もあります。「パリの胃袋」と呼ばれたレ・アールには、1969年に中央市場が移転するまで毎日のように通い、市場で働く人々や飲食店に集まる客を撮り続けました。彼がとても愛した場所だったので大切に記録を残したい気持ちが強かったのでしょう。

ロベール・ドアノー《サン・ミシェル炭坑、ロレーヌ地方》
1960年 ©Atelier Robert Doisneau / Contact

本橋成一《木下サーカス 東京 二子玉川園》1980年
©Motohashi Seiichi

山田　日常のささやかなドラマを捉えた彼の作品は「ドアノーの小劇場」と呼ばれますが、本橋が1980年代初頭に上野駅で撮影したシリーズも、駅を舞台にした劇場感があります。1984年に始めた築地魚河岸シリーズは、市場と働く人々の姿を何年もかけてルポルタージュしました。激動する時代のなかで、人々の暮らしを含めて都市の様相が変わっていく。それを写真に収めていく意識が二人は非常に似ている気がします。

── 本展では本橋がチョルノービリ（チェルノブイリ）原発事故（1986）の被災地で撮影した作品と、ドアノーによる少数民族ロマの人たちの写真が併せて展示されます。どんな狙いがあるのでしょうか。

山田　二人が被写体とどう向き合ったかということに、よりフォーカスしたいと考えました。エネルギー問題に強い関心を持つ本橋は、1991年にウクライナや隣国ベラルーシの被災地を訪れ、土地を離れず暮らす人たちを撮り始めました。多くの痛ましい場面に遭遇しましたが、自分はそこで生きる一人一人の「命」を見つめ、悲惨さでなく、日々の生活や放射能汚染問題がある中での自然の恵みを伝えたいと考えたそうです。

── ロマは貧困や差別の問題が根強くありますが、ドアノー作品はそこにある美や安らぎ、家族の温かさを見つめた視線が印象的です。

佐藤　生前、ドアノーは「悲惨な状況や悲しい出来事をあえて写真で伝える必要はない、生きているだけで大変なのだから」と語っていたと聞いています。代わりに、日常にある小さな幸福に目を向けて写真で採集していきました。辛いことがあっても、少し視線をずらすだけで、思いがけない美しさや楽しさが見つかるよと彼の作品は教えてくれます。

── 両作家の作品からは被写体への思いを感じます。

佐藤　ドアノーは、フランスで「ヒューマニズム写真家」という言い方をよくされるのですが、本橋の活動もヒューマニズムに根差していると強く感じます。本展では、友人のチェロ奏者モーリス・バケを長年にわたって撮影したシリーズも紹介しますが、二人がこの「共同作業」を心底楽しんでいる様子が伝わると同時に、ドアノーの写真における実験精神もうかがえます。

山田　演出によって人間の真実が表現できることもあるので、ドアノーはそれを大切にしたのではないでしょうか。本橋はキリスト教精神に基づく「自由学園」に転入し、掃除から食事作りまで自分たちの手で行う寮生活を送ったそうです。2000年代に写真と映画で撮影した「真木共働学舎（アラヤシキ）」は、彼の中高の恩師が長野県の山の麓に設立した生活共同体が舞台です。様々な人間同士が助け合いながら共生する状況への共感は、自由学園での経験も大きいと感じますね。

ロベール・ドアノー《ロマの娘、マリーヌ、モントルイユ》1950年
©Atelier Robert Doisneau / Contact

── 最終章はドアノーの数少ないカラー作品が登場します。

佐藤　DATAR（国土整備庁）の依頼で1984年にパリ郊外を撮影したシリーズです。展覧会冒頭の郊外を撮った作品と比べると、開発が進んで新興住宅地に生まれ変わり、街の風景が一変したことが分かります。

── 本展は二人の様々なタイプの作品が集まり、共通性と独自性が同時に見えてきそうです。

山田　両写真家の軌跡や作品から生まれる物語の共鳴を味わったり、日仏の都市の違いを見つけたりと、思い思いに楽しんでいただければ。最近暗いニュースが多い中で、二人の作品は私たちが心豊かな生活を送るためのヒントになってくれそうです。

佐藤　人間への関心と愛情に支えられた両作家の作品は、普遍性があり親しみやすいと思います。どちらの写真も語りすぎないというか、「余白」があるので見る人が自分の経験や物語を投影して考えたり、感じたりできるのも魅力ですね。

（インタビュー・構成　永田晶子）

本橋成一《静夫と妹 福岡 鞍手町》〈炭鉱〉より 1965年 ©Motohashi Seiichi

※1 1950年に米雑誌『ライフ』に依頼され、俳優カップルをモデルに撮影したドアノーの代表作。

※2 小沢昭一（1929-2012）俳優、エッセイスト。個性的な名脇役として舞台やテレビで活躍。伝統芸能や大衆演芸の発掘と記録に尽力し、研究誌『季刊藝能東西』（1975〜77）を刊行した。

本橋成一 Motohashi Seiichi

1940年東京・東中野生まれ。1960年代から市井の人々の姿を写真と映画で記録してきた写真家・映画監督。1968年「炭鉱〈ヤマ〉」で第5回太陽賞受賞。以後、サーカス、上野駅、築地魚河岸などに通い作品を発表。写真集『ナージャの村』で第17回土門拳賞、映画「アレクセイと泉」で第12回サンクトペテルブルグ国際映画祭グランプリを受賞するなど国内外で高い評価を受けている。

ロベール・ドアノー Robert Doisneau

1912年パリ郊外のジャンティイ生まれ。エコール・エスティエンヌで石版を学び、写真家アンドレ・ヴィニョーの助手となる。自動車会社ルノー社のカメラマンなどを経て、1939年フリーとして活動を開始。特にパリの庶民たちの日常をとらえた写真で高い評価を得て、ニエプス賞（1956年）、フランス国内写真大賞（1983年）など受賞多数。1994年逝去（享年82歳）。

本橋成一とロベール・ドアノー　交差する物語

Motohashi Seiichi and Robert Doisneau Chemins croisés

2F 2023.6.16｜金｜ – 9.24｜日｜

左）本橋成一《上野駅 東京》1981年 ©Motohashi Seiichi
右）ロベール・ドアノー《エベール広場の子どもたち、パリ》1945年 ©Atelier Robert Doisneau / Contact

本橋成一は東京に生まれ、50年以上にわたり、写真と映画によって、揺れ動く社会とそこに暮らす人々の姿を記録してきました。一方ロベール・ドアノーは、パリや自身が生まれたパリ郊外を舞台として、常にユーモアをもって身近にある喜びをとらえてきました。生まれた時代・地域が異なる二人の写真家ですが、奇しくも炭鉱、サーカス、市場など、同じテーマによる優れたルポルタージュを残しています。そして、それぞれに第二次世界大戦による混乱を経験した二人は、慎ましくも懸命に生きる人々の営みの中に、力強さと豊かさを見出し、失われゆく光景とともに写真に収めてきました。

多くの対立、紛争の絶えない現代において、人間に対する際限のない愛情と好奇心が生み出す視線、そしてユーモアや優しさをもって現実や社会と関わった二人の写真家によって編み出される物語を通して、生きることの豊かさについて考える機会となれば幸いです。

[観覧料] 一般800円 ほか 各種割引あり
※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
[後援] 在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本／J-WAVE 81.3FM　[助成] 公益財団法人花王芸術・科学財団
[協賛] 東京都写真美術館支援会員　[特別協力] アトリエ・ロベール・ドアノー／コンタクト／ポレポレタイムス社

展示構成

第1章｜原点
第2章｜劇場と幕間
第3章｜街、劇場、広場
第4章｜人々の物語
第5章｜新たな物語へ

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

TOPコレクション 何が見える？

「覗（のぞ）き見る」まなざしの系譜

TOP Collection: A Short History of Peep Media and the Gaze

3F 2023.7.19｜水｜ – 10.15｜日｜

ネグレッティ＆ザンブラ《クリスタル・パレス（ステレオビュワー付）》1854年頃 ダゲレオタイプ

本展では、東京都写真美術館の写真史・映像史に関するコレクションの中から、「覗き見る」ことを可能にした装置と、それによって生み出されたイメージ、そして「覗き見る」ことからイマジネーションを広げた作家たちの多様な表現をご紹介します。

写真や映像を撮影するカメラは、まさに覗き見る装置であると言えます。カメラの原型となったカメラ・オブスクラは、その機構を流用することで、ピープショーと呼ばれる視覚装置としても楽しまれていました。覗き見る装置のヴァリエーションとしては、顕微鏡や望遠鏡などの科学的な装置や、ステレオスコープのような立体視のための装置、動く絵を生み出す装置などがあります。

さらに、カメラによって写し出されたイメージを定着させる写真術の普及により、覗き見ることで得られたイメージが世界中に届けられ、多くの人々の間で共有されることとなりました。写真をステレオカードに用いることで没入感は飛躍的に高まり、連続写真は映画の誕生へと寄与しました。

私たちを魅了してやまない「覗き見る」行為と、それによって生まれるまなざし。「覗き見る」まなざしの系譜を、写真美術館のコレクションから探求します。

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

1 覗き見る愉しみ

覗き見る視覚装置の最初期の例として、17世紀末にヨーロッパで考案されたピープショーがありました。ピープショーは、1つ以上の覗き穴を持ち、箱のように閉ざされた空間を覗き穴越しに見ると、中の絵が立体的に見える視覚装置で、室内で楽しむもののほか、見世物師による興行用のものも存在しました。日本にも江戸時代に「覗き眼鏡」が伝わりますが、レンズを嵌め込んだ穴から、何らかの仕掛け（からくり）がなされた箱の中を覗き見る「のぞきからくり」が江戸から明治、大正期において庶民の娯楽として親しまれていました。

出品作品：カメラ・オブスクラ、眼鏡絵、覗き眼鏡、ピープショー、のぞきからくり

2 観察する眼

16世紀末から17世紀初頭に発明された顕微鏡と望遠鏡は、どちらも覗き見ることで人間の視覚を飛躍的に拡張させる機能をもった装置といえます。また、観察する対象を客観的にまなざすカメラの眼は、肉眼では捉えることのできない一瞬の動きを切り取ることを可能にします。1870年代初頭から連続写真の実験に没頭した写真家エドワード・マイブリッジは、1878年にギャロップで走る馬の写真を公表しました。生理学者であるエティエンヌ＝ジュール・マレーは、連続写真の公表を機にマイブリッジと出会い、のちに写真銃の発明に至ります。

出品作家：ウィリアム・ベンジャミン・カーペンター、ロール・アルバン＝ギヨー、エドワード・マイブリッジ、エティエンヌ＝ジュール・マレー、ハロルド・ユージン・エジャートン

3 立体的に見る

2枚の画または写真を、左右の目で別々に見ることによって立体感を得るステレオスコープ。最初の装置が1838年に発表された後、持ち運びが簡便な小型のビュワーが登場することで、ステレオスコープは大きな流行を生み、人々は写真に写された世界を現実さながらに立体的に見ることに熱中します。強い立体感と没入感をもたらすステレオビュワーは、一世紀以上前に、同様に人々を夢中にさせた視覚装置、ピープショーと重なります。さらにはヘッドマウンドディスプレイを装着しVRを体験する私たちもまた、覗き見る装置と体験の歴史の中にいるのです。

出品作品：ステレオスコープ（ビュワー）、ステレオカード

a

b

c

d

e

f

g

a）作家不詳《光学箱》19世紀頃
b）作家不詳《カメラ・オブスクラ》19世紀頃
c）《プラクシノスコープ》19世紀頃
d）エドワード・マイブリッジ《馬と人間》1878-79年 鶏卵紙
e）伊藤隆介《オデッサの階段》2005年 シングルチャンネル・ヴィデオ・インスタレーション（第4回恵比寿映像祭での展示）
f）作家不詳《ステレオビュワーを覗く子ども》19世紀頃
g）オノデラユキ《No.1》〈Camera〉より 1997年 ゼラチン・シルバー・プリント

4 動き出すイメージ

現在の映画の原型といえる映像装置は、リュミエール兄弟により1895年に一般公開されたシネマトグラフとされていますが、他にも19世紀には残像現象や錯覚を利用して、静止画像を動く絵へと変容させる多種多様な視覚装置が発明されます。残像や錯覚といった現象を生み出すには、視野を限り視線を固定することが効果的であるため、フェナキスティスコープ（1832年）、ゾートロープ（1834年）、プラクシノスコープ（1877年）、そして発明家トーマス・エジソンが1891年に開発した撮影装置キネトグラフと映写機キネトスコープなど、覗き見る構造を利用した多くの装置が誕生しました。

出品作品：ゾートロープ、プラクシノスコープ、フェナキスティスコープ、キノーラ、キネトスコープ（フィルム制作：石川亮）

5 「覗き見る」まなざしの先に

外界の景色を写し出すカメラ・オブスクラは、写し取った像を定着させ、レンズ越しに覗き見るカメラへと発展しました。カメラは覗き見る主体と対象を結び付け、親密な関係をもたらす一方、覗き見ることは、まなざしの不均衡を生む行為でもあり、愉しみの中にあやうさを孕みます。一人一台スマートフォンを持ち、日々カメラを向け合い、気づかないうちに被写体となるような環境に置かれる私たち。日常にあふれる「覗き見る」まなざしと、どのように向き合い、受け止め、まなざし返し、フレーミングという行為を再構成することができるのか。4名の作家たちの探求から、「覗き見る」ことの可能性と、その先にあるまなざしのあり方を考えます。

出品作家：奈良原一高、オノデラユキ、出光真子、伊藤隆介

関連イベント

会期中、イベントを予定しています。詳細は決定次第、ホームページで公開します。

▶展覧会担当学芸員によるギャラリートーク
▶手話通訳付きギャラリートーク
▶出品作家によるアーティストトーク
9.9（土）講師：石川亮（出品作家）、南俊輔（映像作家）
10.15（日）講師：伊藤隆介（出品作家）

▶「覗き見る」メディアとイメージをめぐるレクチャー
9.24（日）講師：草原真知子（本展協力者）、細馬宏通（早稲田大学教授）
▶映画のはじまり体験ワークショップ
8.19（土）講師：郷田真理子（フィルム技術者）
▶TOPボランティアによるアニメーションワークショップ
7.29（土）、30日（日）

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

田沼武能
人間讃歌

Tanuma Takeyoshi: Viva Humanity!

B1F 2023.6.2|金| – 7.30|日|

田沼武能は、東京写真工業専門学校（現・東京工芸大学）卒業後、写真家・木村伊兵衛に師事し、『芸術新潮』の嘱託写真家として芸術家や文化人を撮影、その後はタイム・ライフ社の契約写真家となるなど、フォトジャーナリズムの世界で華々しい活躍を展開しました。1972年からはライフワークとして世界の子どもたちを撮影、黒柳徹子ユニセフ親善大使の各国訪問に私費で同行取材を行い、生涯で130を超える国と地域に足を運ぶなど、国内外で精力的な取材活動を展開し、自身の作品を発表し続け、その旺盛な好奇心と行動力は生涯衰えることはありませんでした。本展では未発表最新作「武蔵野」を初公開するとともに、ヒューマニスティックなまなざしで人間のドラマを描き続けてきた田沼の70年を超える写真家としての軌跡を辿ります。

《聖母巡礼の祝祭に夜を徹して踊りあかす人びと、スペイン、アンドゥハル》
1975年 田沼武能写真事務所蔵

田沼 武能（たぬま・たけよし 1929–2022）
Tanuma Takeyoshi

東京・浅草生まれ。1949年にサン・ニュース・フォトスに入社後木村伊兵衛に師事。1966年、アメリカのタイム・ライフ社と契約。ライフワークとして世界の子供たち、人間のドラマ、武蔵野や文士・芸術家の肖像を撮り続けた。1979年モービル児童文学賞、1985年菊池寛賞などを受賞。1990年紫綬褒章、2002年勲三等瑞宝章を受章、2003年文化功労者に表彰され、2019年に写真家初の文化勲章を受章。2020年朝日賞特別賞を受賞。

|関連イベント

講演会

[日時] 2023.7.8（土）14:00–
[出演] 熊谷博人氏（装丁家）、
多田亞生氏（編集者）、
田沼敦子氏（田沼武能夫人）
[会場] 東京都写真美術館1階ホール
[定員] 190名
[参加費] 無料
＊当日10:00より1階総合受付にて整理券を配布。

第1章 「戦後の子供たち」

自身も思春期を戦時下で過ごし、東京大空襲で凄惨な経験をした若き日の田沼は、生まれ育った下町で終戦後の東京で生きる子供たちの姿を活写しました。生き生きとした子供たちの姿と、彼らが映す今は失われた昭和の日本の姿を伝えます。

《木場の丹下左膳、深川木場》1956年 東京都写真美術館蔵

第2章 「人間万歳」

何よりも人間の「生きる姿」に興味を持った田沼は、生涯のライフワークとして世界の子供たちをはじめ、世界の人々の写真を撮影することに注力しました。田沼を魅了してやまなかった世界の子供たち、世界の人々のまなざしに触れます。

《板に書かれたコーランで勉強、モーリタニア》
1997年 田沼武能写真事務所蔵

第3章 「ふるさと武蔵野」

東京の下町に育った田沼にとって、心象風景としての「ふるさと」のイメージそのものだった「武蔵野」。戦後の高度経済成長の陰で急速に姿を変えようとしていた日本の原風景に目を凝らし、生涯にわたり撮影を続けた「武蔵野」を紹介します。

《鳳凰の舞、西多摩郡日の出町平井、春日神社》
2016年9月 田沼武能写真事務所蔵

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／朝日新聞社 [特別協賛] キヤノンマーケティングジャパン（株）／東京工芸大学 [協賛] 東京都写真美術館支援会員 [協力] （公社）日本写真家協会／（公社）日本写真協会／全日本写真連盟／（一社）日本写真著作権協会

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

TOPコレクション セレンディピティ
日常のなかの予期せぬ素敵な発見

TOP Collection: Serendipity – Wondrous Discoveries in Daily Life

3F 2023.4.7|金| – 7.9|日|

「偶然と才気によって、予期しない発見をすること」を意味する「セレンディピティ」をキーワードに、ありふれた日常の何気ない一瞬を撮影した作品などを見ていきながら、写真家たちに訪れたささやかな心の機微を探ります。何年も続く制限された日々のなかで、様々な辛い出来事や不都合な出来事をたくさん経験してきた私たちですが、こうした写真家たちの視点をヒントに、セレンディピティの産物としての癒やしや心の豊かさを回復する種を見つけることができるかもしれません。

奈良美智《NY Drawing (left); Yogyakarta Cat (right)》〈days 2003-2012〉より 2003-2012年 東京都写真美術館蔵
©Yoshitomo Nara

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

風景論以後
After the Landscape Theory

B1F 2023.8.11|金・祝| – 11.5|日|

『略称連続射殺魔』1969年 東京都写真美術館蔵

風景とは何か。1970年前後の日本にあらわれた風景論は、どこにでもある風景を現実の側からとらえ直そうとしました。視覚芸術を通じて、文化、社会、政治との関係から風景を表現していくその実験は、同時代の写真家、映像作家に大きな影響を与えました。本展では、風景論をめぐる歴史的な写真映像表現を出発点に、今日の現代作家の作品群を繋ぎます。技術の発展により、誰もが日常的に風景をとらえることができる現代において、写真映像表現を改めて見つめる機会をつくります。

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社 [助成] 公益財団法人 ポーラ美術振興財団

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

東京都写真美術館 年間パスポート
「TOPMUSEUMPASSPORT 2023」販売中

TOP MUSEUM
PASSPORT 2023

展覧会を無料または割引でご鑑賞いただけるお得なパスポートです。本誌裏表紙スケジュール内の(収)は無料、(企)は4回まで無料、その他は割引料金となります。特典の詳細は、当館ホームページのご利用案内からご確認ください。

販売期間	2023年4月1日(土)～ 2023年9月30日(土)
販売価格	3,300円(税込)
販売場所	当館1階 総合受付 ※販売は開館日の閉館時間30分前までとなります。
有効期間	購入日 ～ 2024年3月31日(日)

詳細はこちら▶

1F HALL / 上映

最新の
上映スケジュールは
こちら▶

1F 日光物語

日光二社一寺への参道入口に実在する人気カフェ「本宮カフェ」を舞台に、カフェを経営する大場嘉門とその家族、そして町の人々や日光を訪れる人々など、人と人が織りなすヒューマンコメディ。主演は、AKB48を3月に卒業した武藤十夢と、ミュージシャンとしてだけでなく俳優としての評価も高いスネオヘアー。監督は2020 年に公開され今も上映が続いている『おかあさんの被爆ピアノ』を製作・監督した五藤利弘。

© 日光映画製作実行委員会

[上映期間] 2023.6.17(土) – 6.23(金)
[休映日] 2023.6.19(月)
[料金] 一般1,800円、学生(大学・専門・高校)1,500円、シニア(60歳以上)・中学生以下(3歳以上)・障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名まで)1,200円

監督・脚本:五藤 利弘／2022年／日本／92分／DCP

〈お問い合わせ〉新日本映画社
TEL.03-5843-1935
〈公式サイト〉nikkoeiga.com

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
(株)資生堂
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
ピクテ・ジャパン(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アイング(株)
アオイネオン(株)
(株)アクト・テクニカルサポート
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アフロ
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
(一財)AVCC・霞が関ナレッジスクエア(KK²)
SMBC日興証券(株)
(株)NHKエデュケーショナル
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
ENEOSホールディングス(株)
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
ゲッティイメージズジャパン(株)
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三愛オブリ(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
(株)JTB
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校／東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーグループ(株)
(株)西武・プリンスホテルズワールドワイド
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
台新國際商業銀行
大成建設(株)
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)髙島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
(株)東京ダイケンビルサービス
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ
(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロンマネージメント
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
日機装(株)
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
(株)日本廣告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケーションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハーツ
パナソニックホールディングス(株)
(株)パラゴン
(株)バンダイナムコフィルムワークス
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善雄松堂(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール
(他1社)

支援会員の
詳細は
こちら▼

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人
(一財)=一般財団法人

(令和5年5月現在・五十音順)

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。写真集や関連書籍はもちろん、グッズ類も豊富に取り揃えております。1枚あれば様々な用途にお使いいただける、「かまわぬ」のてぬぐいは、和風の柄からモダンな柄などさまざま。これからの季節の贈り物にもぴったりです。

かまわぬ　てぬぐい　各種1,100円(税込)～

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)　[TEL] 03-6447-7684
[定　休　日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE
カフェ

フロムトップ

台湾で人気の屋台飯、ルーロー飯をワンプレートでご用意しています。コラーゲンたっぷりの皮付きの豚肉にこんにゃくを加えた食感楽しいルーロー飯に色鮮やかな野菜を添えました。コーヒーまたは日本茶付き1,500円(税込)。

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-21:00 ※当面は10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730
[定　休　日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

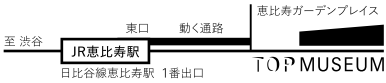
	3F	2F	B1F	1F
2023 6	TOPコレクション セレンディピティ 収 4.7(金)–7.9(日)	本橋成一と ロベール・ドアノー 交差する物語 企 6.16(金)–9.24(日)	田沼武能 人間讃歌 企 6.2(金)–7.30(日)	日光物語 6.17(土)–6.23(金)
7	TOPコレクション 何が見える? 収 7.19(水)–10.15(日)			鬼に訊け 宮大工西岡常一の遺言 6.24(土)–7.2(日)
8			風景論以後 収 8.11(金)–11.5(日)	
9				東京裁判 4Kデジタルリマスター版 8.8(火)–8.18(金)
10	見るまえに跳べ 日本の新進作家 vol.20 企 10.27(金)–2024.1.21(日)	ホンマタカシ 収 10.6(金)–2024.1.21(日)		
11			東京工芸大学 創立100周年記念展 写真から100年 誘 11.11(土)–12.10(日)	
12			プリピクテ「Human」 誘 12.15(金)–2024.1.21(日)	
2024 1				
2	恵比寿映像祭 2024 2.2(金)–2.18(日)			
3	3階展示室のみ 3.24(日)まで	イメージと記憶 企 3.1(金)–6.9(日)	APAアワード2024 誘 2.24(土)–3.10(日) アンリ・カルティエ=ブレッソン 眼の記憶 誘 3.16(土)–5.12(日)	東京都内の美術館・博物館等をお得に見られる「ぐるっとパス」 ▼詳細はこちら▼

企 企画展　収 収蔵展　誘 誘致展

「シルバーデー」「家族ふれあいの日」を6月から再開します

シルバーデー	毎月第3水曜日(65歳以上の方は観覧料が無料になります。※年齢を証明できるものの提示が必要)
家族ふれあいの日	毎月第3土曜日と翌日曜日(都民で、18歳未満のお子様同伴のご家族は、観覧料が半額になります。※都民であることを証明できるものの提示が必要)

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00–18:00(木・金は20:00まで)※入館は閉館30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始、臨時休館

東京都写真美術館ニュース「アイズ2023」113号 □発行日:2023年6月10日 □企画・編集:東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本:株式会社公栄社 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2023 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。